

# 歴史の転換点に立つ東アジア

## 韓国と日本の関係をどう考えるか

元韓国翰林大学教授 池明観さんに聞く

聞き手 本誌編集委員 黒田貴史

- 日韓併合から一〇〇年をどう見るか
- 軍事独裁政権の後遺症
- 大衆化した民主主義の時代
- 北朝鮮にどう関わるのか
- 韓国と日本の市民の役割とは
- 追記 北の核実験と南の前大統領の死

来年二〇一〇年には、韓国併合一〇〇年を迎える日韓関係。一〇〇年の間に日韓関係はどのような変遷をたどったのか。戦前に計画された鉄道では、東京・ソウル間の移動に丸一日、東京・北京間の移動に丸二日を要した。日婦りでの往復も可能になった今日、東アジアの市民交流はどうあるべきなのか。韓国の軍事独裁政権と闘い続け、金大中政権下では対日文化開放を主導した現代韓国を代表する知識人が新しい東アジアを展望する。

### 日韓併合から一〇〇年をどう見るか

——ここでは、大きく東アジアの歴史とこれからをどう考えるかというところでお話をいただければと思います。ちょうど来年が日韓併合一〇〇年にあたるのですけれども、この一〇〇年をどのようにとらえたらよいのでしょうか。この一〇〇年の区切りはどこにあるとお考えですか。

池明観 ● 韓国と日本との関係で重要なのは、やはり一九一〇年の日韓併合と一九四五年の解放ということになります。さらにいろいろな批判を浴びていますけれども、一九六五年の日韓基本条約の成立です。そこで戦後初めて公式に日韓の外交関係が樹立されますので。それから、もうひとつの大きな時代的契機というのは一九八八年です。一九八七

年に六月抗争が起こり、八八年に民主主義が回復します。そこで日本との間で、民主主義を建前にした両国の関係が出發するわけです。それまで、六五年以降というのは、日韓癒着といういろいろな雑音の多い時代でした。八八年からは、一応そのような時代を卒業したといえましようか。それをだんだん抜け出すようになってきたということ、大きな区切りではないかと思えます。それから、今日までの時代が続いていると思えます。

一九一〇年に朝鮮は日本の支配下に入り日韓併合の時代に入るわけですが、一八七六年に日朝修好条規（江



華島条約)が成立しましたが、これはいわば両国のあいだにおける不平等な関係の成立ですね。そういう歴史が四五年まで続いて、それから、歴史の一種の逆転とでもいいましようか、後に南北両国に分裂しますが、解放された韓国になります。

私はいろんな意味で、豊臣秀吉の一五九二年の文禄・慶長の役を非常に重視しています。日本は東アジアの文化圏の中において、いちばん東のはずれに位置するマージナルな存在であったといっているでしょう。それが文化の中心に向けて反撃を加えるという、ネメシスの時代がはじまつたわけです。当時ヨーロッパでは大航海時代に入って、日本はヨーロッパの鉄砲や航海術を取り入れて、大陸侵略をはじめた。中国を中心とする文化圏にいた日本が、逆転する契機を手に入れたと言えましようか。それは挫折しますが、文禄・慶長の役は歴史の逆転を主導した、いわば明治以降の時代にとって先駆的なあり方であったわけです。日

チ・ミョンクワン

一九二四年生まれ、ソウル大学で宗教哲学を専攻。朴正事政権下、月刊「思想界」主幹。一九七二年来日。東京大学大学院での研究を経て、一九九三年帰国まで東京女子大学教授。帰国後は、日韓共同歴史研究委員会韓国側座長、韓日文化交流政策諮問委員長、翰林大学日本学研究所長などの要職を歴任。日韓交流の礎を築いた。主な著作「池明観自伝 境界線を超える旅」（岩波書店）、「T・K生の時代と「いま」—東アジアの平和と共存への道」（葉社）、「韓国近現代史」増補版・韓国文化史（いずれも近刊 明石書店）

本の歴史教科書の中で、明治以降においては、豊臣秀吉の朝鮮への侵略を非常に高く評価して、倭寇と一直線におき、大陸侵略のイデオロギーとしました。そういう時代が、一九四五年にはまた逆転していったように思いますね。

日本はアジア侵略への野望を挫かれてしまうわけですが、日本はそれからアジア回避の時代を経験します。できるだけアジアに関与しないように、そうすることで、いろいろな意味において過去の歴史がよみがえることを避けてきたといえますか。知識人もアジアに関与しない、関係を持たないという姿勢でした。実際はアメリカと関係しながら、日本の民主化を進めて、産業社会を発展させていくという時代でした。

それからようやく、六五年と八八年を経ることによって、日韓はアジアにおいて、その内実はともかくとして、民主主義国家としてお互い交流しあう時代に入ってきたと見えます。

——北朝鮮のことも関わってくるかもしれませんが、いわゆるアジアの近代化のモデルとしての明治日本があります。強権的な政治体制をつくって、開発独裁というかたちで経済を振興させていく。日本は先行するかたちで明治からスタートさせて、おそらく韓国も四五五年以降、特に軍事独裁時代がその時代ではないでしょうか。そうしたアジア・モデルの近代化というものが、そういう道しかなかった

たのか。あるいは他の選択肢がその時代に取らえなかったのか。

池●日本がヨーロッパ・モデルを選択するということは、すなわち軍事的政治的支配のモデルを選択することです。そして、アジアにおいて、そういうモデルを選択する可能性は、伝統社会との関係において、中国、朝鮮、日本の東アジア三国の中で、日本が最もその可能性を持っていました。伝統的社会として、日本が武士社会であったことが重要です。つまり富国強兵を選択できる。それを国民的な目標として掲げることが可能であった。非常に短時間の間に国民を動員することができた。その可能性を持っていた唯一の国が日本ではなかったかと思えます。

私は福澤諭吉がアジアの中国人や朝鮮人を蔑視したとはあまり思わない。ただ、中国や朝鮮が、その時代の近代化の波の中で遅れをとっているという考え方であったと思います。だから、日本はそれに対して遅れをとってはならないと考える。本来的に日本国民は優秀で、近代国家としての道を先駆的に歩むことができるが、他の国民は劣等である、というような思考は彼にはなかったといえるのではないのでしょうか。他の国々は固陋な古いアジア文明の中に埋没しているが、日本はそうなつてはならない、日本はそれを脱して欧米の隊列に伍することができなければならないという考えです。

今日の状況は、東アジアの歴史の中において、ひとつの未曾有の時代、かつてなかった時代です。非常に卑近な例で申しますと、戦前、日本が構想した大陸横断鉄道の始発駅・東京発の列車に乗れば、ソウルまで丸一日、北京まで丸二日四八時間以上の道のりでした。ところが、現在では東京からソウルまでが二時間あまり、成田から北京までが四時間弱で飛べるような時代になり、莫大な人びとが往復するような時代を迎えています。これは東アジアの歴史上、未曾有の時代に我々は遭遇しているということです。

そして、中国も今、台頭してきますけれども、豊かさにおいて、かつて経験したことのない豊かな時代です。それとともに、封建的な時代とは違った意味において、現代的な格差が極限まで増大していく。このことよって多大な間隙がそこにできてくる。大衆的開放とともに、個人が非常に自己中心的で閉塞的な時代になるというような逆説ですね。ある意味においては無限なる自由があるように見えて、実際は限りなく拘束を感じなければならないという時代です。これは東アジアも全く未曾有の世界の中に入っていきながら、過渡的で転換期的な状況の中に陥っているのではないかと思えます。

——少し話を戻しますけれども、いわゆる明治日本の近代化モデルは、武士社会であった日本に唯一その可能性があったということ

すけれども、解放後の韓国、特に軍事政権以降、日本が植民地政策として実行しようとしていたことを朴正熙たちは学習したのか、それを踏襲したことをやりました。韓国が開発独裁モデルを戦後可能にした条件は何だったのでしょうか。

### 軍事独裁政権の後遺症

池●近代化を可能にした条件ですね。私もだいたい**朴正熙**（パクチョンヒ）政権を批判して闘いました。私も最近困っています。一応の歴史はそうのように流れましたけれども、その時に朴正熙政権があのような強権的なやり方でもって近代化を推し進める、それが唯一のオルタナティブだったのかということに対して、私は非常に疑問を感じています。たぶん、朴正熙の方策でなくても、韓国は十分に近代化したと思えますよ。戦後の日本が歩んできた道もあるではありませんか。朴正熙がなしたマイナス面、それを不可避的なマイナスであると思うよりは、避けられるべきマイナスであった、マイナスを犯してしまった、それで朴正熙の軍事政権のあり方に問題があったというように思います。

だからその当時に韓国において、民主的な政権が立つていれば、いろんな問題、いろんな後遺症を患っている現在の状況なしに、スムーズに今日まで来られたのかもしれない

いと私は思います。

——朴正熙の思考法が軍人のものであるということが大きな問題なのでしようか。AからBへ来るときに、民主的な手続きをとれば迂回して回らなければいけないものを、たぶん軍人的に、こう進めば一番早いではないか、そういう考え方だったのでしようか。

池●朴正熙政権というのは、非常に短絡した考え方を持っていたと思います。彼らにとつてはブライマリー・コンサーン、すなわち第一の課題は政権の維持です。自分らがクーデターを起こして政権を維持する。これは今日の日本の自民党の政権だつて同じだと思えますけれどもね、とにかく最も重要な課題は政権の維持である。自分の政権へのサポートをうるために、是が非でも近代化を押し進めなければならぬ、それに国民を駆り立てなければならぬ、ということだったのでしよう。

国民の抵抗が激しければ激しいほど、その代償として近代化を掲げようとした。国民の抵抗が激しくなければ、もう少しゆっくり行けたかもしれない。しかし、国民の抵抗があるからこそ、近代化のめばしい成果を上げなければならぬと、突つ走つていったと思います。しかし、朴政権の終わりごろになると、国民の抵抗がはるかに強くなつて、その成果では国民が満足しなくなつてきた。成果で国民をなだめることができなから、とうとう崩壊してし

まつたわけです。

しかし、それ以降、抵抗した国民のことは歴史から捨象されてしまつて、彼の近代化の成果だけを今問題にしていう状態がきている。歴史に対して公正を期しながら、何が彼の功績なのか、それが何によつて、どのようななされたかを歴史的に再検討しなければならぬと思えます。私のように朴政権の初めから終わりまで批判してきた立場からも、そういうことが必要だと感じています。

韓国は政治的揺れの強い国家、国民です。今の李明博イ・ミョンボク政権が成立したときも、最初の支持率は七〇パーセントでした。それからアメリカ牛肉の輸入解禁問題が起きて、一気に一〇パーセントぐらゐに下がつてしまつた。それから、牛肉の問題が一応決着がつくと、今日においては約四〇パーセントに回復しました。政権に対する支持そのものが、こういうひどい揺れを経験しています。

このような韓国の状況の背後にはいかなる政権も国民とともに歩んで行くはずなどないという韓国国民の厳しい見方があります。国民は政権に対して不安な目つきをしながら、時にある契機を迎えるものとすこく抵抗します。その政権を一〇パーセントしかサポートしないようになる。揺れの激しい政権支持の動き方をします。これは、軍事政権の後遺症が今でも残つていると考えると理解できるので

ないでしょうか。朴正熙政権を非常にけなすかと思うと、時には朴正熙政権はよくしたではないか、と評価が揺れる。

その場合捨象されるのは、過去は民主政権ではなく、軍事独裁政権だったということです。今は民主政権である、民主化が施行されているという前提に立つて、朴正熙を評価している。それは、朴正熙の全面的評価であるよりは、韓国経済を近代化した、それだけを評価している。いま、民主主義の下で国民の自由が保障された立場において、朴正熙を評価しているということですが。評価の時点によって、いろいろな違いが生じてきていると思います。これから朴正熙の韓国の近代化をどう位置づけるかということは大きな問題ですが、なぜそのように多くの犠牲を払わなくてはならなかったのかを十分検討する必要があります。日本の明治以降もそうですが。

日本では戦争が終わっても三木清が獄中で死ぬ状態にまでいつてしまった。それと同じように朴正熙政権の下で、なくてもよかったはずの多くの犠牲が払われた。しかし、今になると、もうそれを云々するよりは、経済的な発展という一面を評価している。評価の視点がだいぶずれてきたことを思います。歴史的評価とはそんなものでしょう。

——先ほどの現代の民主主義の話ですが、日本も韓国もいわば大衆社会というか、さっきおっしゃっていた個人が物質的には自由を享受

できる時代でありながらも、自由な個人が連帯して社会を変革していくという形で動くよりも、むしろバラバラに寸断されているのではない。投票行動の中でも非常に利根的な投票行動としか思えないものがたくさんあります。そのなかで民主主義をリードするはずの知識人の役割も大きく変わっているのでしょうか。

## 大衆化した民主主義の時代

池●私は、韓国での日本に対する評価は歴史的に公正でなければならぬと思います。たぶん、韓国が近代化、今日の産業社会を形成するにあたって、一応の成功を収めたことは、日本と非常に深い関係があると思います。日本という隣国が存在していなければ、韓国の近代化は、現在のようになり成功することはなかったかもしれない。それは、日本が主体的に友好的な関係を示して、韓国の近代化を助けたという意味ではありません。日本が隣に存在している、そして日本の支配を受けた国、朝鮮として、日本に対して批判的でありながら、そこから学ぼうとし、日本を追い越していこうとする情熱がありました。しかもその中に、しばしば言われたように、日韓の癒着が経済の関係をはじめ、いろいろな形で成立していく。この日韓の複雑で奇妙な関係の中において、韓国の現在がある。これは避けることが

できない事実であると思います。そこにはマイナスの要素もあるけれども、多くのプラスの要素もある。たぶん現代化された日本の存在がなければ、韓国の近代化はできなかったか、あるいははるかに遅れたに違いないと思います。そうした意味で、これから日韓関係をかなり公平に評価しなければなりません。

いまでは、日本の知識人は、かつてとは違ってある種の挫折感を感じているのではないかと思います。それは、韓国のように日本よりも、はるかに知識人が重きをなした社会（そこには儒教的な背景がありますけれども）でも同じ傾向にあると言えましょう。韓国では、近代以降において知識人が中心になって、日本に抵抗してきたという歴史もあります。そして、戦後においては、朴正熙の軍事政権を初めとした状況に対して抵抗してきた知識人の歴史がある。アジアにおいて最も歴史的に顕著な貢献をした韓国の知識人。その知識人の役割を今後は期待できない。まるで知識人の社会的役割がほとんど消滅したかのような状態です。現在のように経済がはるかに先に立って進む時代を迎えたことが大きな原因かもしれません。現実の社会がこれまでとは非常に違った社会になってきたのです。知識人によって導かれると考えていた民衆も存在しないような時代になってきた。誰も彼も自分の意見を言うような総知識人

の時代になりました。

だから、日本において知識人たちが挫折感を感じる、あるいは知識人という階層が崩壊してしまったかのように見えるのは、韓国においても同じであり、ある意味では韓国においてもっと激しくあらわれているのかもしれない。それが現状であるわけですね。しかし、これは我々がこれから経験する、あるいは耐えていかなければならない時代である。その次、こういう時代を越えて、この転換点を越えて、いったいどのような知的要素、あるいは文化的要素というものが、登場してくるのか、それを待つべきであるといえるかもしれません。韓国も日本も知的伝統というもの、一種の崩壊に臨んでいるのではないかと私は思います。

——おそらく韓国と日本の両方に言えることではないかと思いますが、新聞や出版に代表されるような、活字の影響力がどんどん低下してテレビなどの映像メディアが主流になっている。政治家でもテレビ映りのいい政治家が票を獲得するという時代を迎えてしまっているのではないのでしょうか。ですから、知識人が何を言うかということよりも、テレビの前で誰か格好よくアピールできる言葉と言えるかというだけの時代に入ってしまったのかなという感想を持たざるを得ません。

池●それは当然言えると思います、日本の民主主義を考

えると、これはよくいわれるように、与えられた民主主義であることはまちがいない。それに比べると韓国の民主主義というのは闘い取られた民主主義であるということは否めない事実です。現在の状況を大づかみにして見ますと、韓国の方が日本の方より自由で、自由な言論も盛んであるような気がします。その背景は韓国の場合は数十年の間、民主化闘争を展開してきて、ようやく勝ち得た自由であるとか、いろいろな問題があるのでしょうか。韓国は大統領制であり、日本は責任内閣制であるというその差にも大きな違いがあると思います。

韓国では選挙への期待も大きいし、選挙により国家全体が非常に激しく揺れるのです。政権は、民主化勢力から保守的政権に移った、その間の動揺というのは、これはもう革命的な動揺です。責任内閣制の場合には、そのような政治的揺れが少ないわけです。

しかし、もう一方では、韓国でも政権が変わることによって、実は社会は大きくは変わらないんだという認識が強くなってきている。今の民主体制、あるいは経済体制の中では、政権の交代といえども歴史的に意味することがとても少なくなってきました。責任内閣制であるのと、大統領制であるのとを問わずに、政権の交代によって社会の変化は現実的にはとても少ない。それはアメリカを見てわかり

ます。オバマ大統領になったということで急激にアメリカの社会が変わるわけではない。変わることができない。政権によって歴史の揺れは少ないという時代になってきた。そうなる政権交代が意味することが国民にとってだんだん薄くなってきた。

韓国の国民は今、五年間は盧武鉉<sup>ノムヒョソ</sup>の場合も我慢するし、李明博の場合にも我慢する。我々韓国の国民、政権を倒した経験を持っている国民としては、五年間我慢するというのは重要なことです。今後はたぶん、保守的な政権であろうとリベラルな政権であろうと、国民はこれに耐えていくでしょう。そのように耐えていくというのは、政権が我々の生活に及ぼす力がかつてよりは弱くなっているから可能だともいえます。政権によって変えられる部分が少ないということと深く関係していると思います。そういった意味では韓国の政権が今後、保守的になろうと進歩的になろうと、あまり変化はないし、同時に、いかなる政権であろうと、保守的であり、かつ進歩的でなければならぬ。もはやイデオロギーが意味をなすことはなくなつたといっているのでしょうか。

たとえば、経済では、企業ができるだけ発展するように支援せざるをえない。一方で、持たない貧しい人を顧みない政権は存在しえない。そうすると、社会主義はそこで成

立するのか。いかなる政権であろうと、実質的には大きく変わらない。貧しい環境にある子どもが優秀であるのに、立派な教育を受けられないということはありえないという社会でなければならぬ。だから、資本主義が強欲なことを行つて平気であることができた時代とは違つてきている。裏返せば、社会主義革命が可能であった時代とは非常に違つた時代になつてしまつた。そして、政権そのものが、かつて考えたような万能な力を持つたものではなくなつて、国民の力がはるかに強くなつてきている。だから私は、革命的な思想は、もう通用しなくなつてきたのではないかと思うのです。

私は年を取つて現実の政治にしがらみはなにもありませんから自由に発言ができるようになったわけですが、知識人が挫折感に陥つていたりとか、現実において革命の可能性を考えられないとか、いろいろ不満はあるんですよ。

私は盧武鉉政権が成立するとき、かなり深く関与して、政権引き継ぎ委員会するとき、大統領の就任演説の起草委員長もやりました。しかし、後からだんだんとこの人たちは駄目だと思ふようになった。というのは、彼らは運動をしてきた人たちとしての欠点をもつていました。どういふことかというところ、革命で勝利した勢力が権力を維持できなくて、常に失敗をくり返したと同じ問題を抱えていました。

世界中で失敗してきた同じ問題ですね。

自分たちの少数同志集団による、いわばフレタニティといひましようか、困難な革命をなしとげた集団としての結束で固まつてしまふ。これでは駄目なんです。闘うときには同志で固まらないといけない。フレタニティで固まるわけです。しかし勝利をした瞬間から、権力を取つた瞬間から、これを解体していかなければならない。考え方のちがう人びとも、国民の民主主義政体において、抱えていかなければならない。盧武鉉政権はこの国民をまとめていく民主主義をつくれなかつた。これが彼が失敗した重要な理由です。

私たちは、ややもすれば、そうやつて闘つてきた勢力の失敗を見てきた。だから、権力を取るまでの関係と、権力を取つた後での頭の使い方が全然変わらなければならぬ。それは、国民の大統領であつて、ある一方のグループの大統領ではないということですね。

盧武鉉政権をサポートしたイデオログたちの問題点を一つ日本の場合と比較しながらあげておきましょう。日本は戦後、侵略をしない国にならなければならぬから（こゝまではいいのですが）、「無害な日本」にならないといけないという。しかし、これは現在では通用しない目標でしょう。いまは、日本がアジア全体に関与せざるを得ない時代

なのに、「無害な日本」というのはもう通用しない考え方で  
す。いかなるイデオロギーも時代的であるのに、戦争直後  
の日本に対する要請をそのままこの時代にまで持ちこして  
しまつてはならないでしょう。

いま、アジアの重要な三国は、いかに新しい認識の下で、  
新しいアジアの関係を築いていくのか。アメリカやヨー  
ロッパを一方におきながら、世界各国との平和な関係をど  
う保つていくのかということを考えなければならない。

実際において、政権担当者はそれを考えなければならな  
いのに、はるかに彼らの思考が遅れていて駄目なんです。  
また批判する側も過去の「無害な日本」を主張した時代の  
イデオロギーに囚われすぎている。それを捨てて、アジア  
の困難な状況の中において、しかもアメリカやヨーロッパ  
との複雑な関係の中において、どうしなければならぬ  
か。先ほども申しましたように、丸二日かけて東京から北  
京に移動する時代から、いまでは日帰りでも往復できる時  
代に変化している。この動かすことのできない客観的事実  
のなかで、これを認めて、我々はいかにしなければならぬ  
いかを考えなければならない。この点で盧武鉉政権の連中  
は一世代前のイデオログであったと思います。

———ここまでお話がいったので、北朝鮮のことをうかがいます。私が  
毎週のようにお話をうかがっていた頃（八〇年代前半）、先生はT・K

生の時代でした。その頃、直接お話をうかがう限りでは、北にはか  
なり批判的なことをおっしゃっていいけれども、T・K生としては、あ  
まり北批判はやっていなかった。当時は、韓国を変えることが重要  
だというお考えだったのだと思います。数年前に、先生は北朝鮮に  
も直接行かれて、ご覧になって、北について今現在どういうお考えを  
持っていていらっしゃいますか。

### 北朝鮮にどう関わるのか

池・盧武鉉政権が失敗した原因は、北朝鮮政策にあつたと思  
います。彼らは、北朝鮮との関係という点、ナショナル・アジェ  
ンダだという。そしてそれが優先すると考えた。たとえてい  
うと、きょうだい喧嘩で非常に激しい対立状態に入っている  
時、その直接的な和解だけを中心にして考えると一歩も前進  
できなくなるでしょう。そのときには、他の親戚や友人関  
係など周辺の間係を改めることによって、その助けを借り  
て関係を修復していく以外の方法はないと思います。

今、北朝鮮との関係において、イデオロギー問題が絡ん  
でいるし、多国間の政治問題が絡んでいるうえに、北では  
政権交代はありえない状態ですから、北朝鮮の権力者幹部  
たちの生存の問題が絡んでいる。南北間問題だけを取り出  
して集中的に解決できるようなことはありません。盧武

鉉政権は、優先課題は北との関係だと思った。そこに彼の間違いがあったと思います。

きょうだい喧嘩が非常に激しい状態が、戦後何十年も凝り固まった状況です。すでに半世紀以上、凝り固まった関係である。一九七〇年代は経済的には北が南に対してやや優位を保っているともいわれましたけれども、それ以後、自由資本主義社会と交流した韓国は、北に対して経済関係では二〇倍、三〇倍も強い国になってきた。そういう状態の中では、南北問題だけを優先しても解決できません。私は、韓国の政権はアメリカや日本をはじめ友好国との関係を優先させるべきだと思います。その関係を生かして、東アジア共同体の繁栄を目指し、北にいて飢えて困っている人びとに向けてできるだけ援助をしながら、東アジア全体のバランスをとりながら、北朝鮮の人びとを支援していく。これ以外の方法はない。北との関係を優先して考えていった場合に、それは成功するはずがありません。

特に金正日政権以降、そう考えざるをえない。まず、北をどうすれば、我々の考える常識的な世界に引き戻すことができるのか。今、北が抱えているいろんな問題があるんです。北朝鮮の観光地に行った韓国人女性を殺害した問題もあれば、核兵器問題などがあるでしょう。世界中を敵にまわすかのような強硬政策をとるような状態から、どうす

ればノーマルな常識的な会話を交わすことができるような状態にするか。それを我々は願わなければならない。

たとえば、私が日本にいた一九七〇〜八〇年代に韓国と中国とは会話がほとんど不可能な状態にあった。当時は韓国と中国に国交がなく、話し合う場もなかったのです。しかし、いまでは、韓国は中国とほとんどオープンに何でも語れるようになった。こういうように常識的でノーマルに話し合える関係をどうつくっていくべきか。そのためには、やはり日中韓の関係を強くしていくことが先であつて、その上で、北への深い配慮、緊急状態にある食糧の援助などをどうやるかということ根気よく考えていくという以外に、北朝鮮問題の解決はありえない。それが最もリアルなやり方であると思います。

北が核兵器を持つということは、北としては、その体制を維持するために、ああいう方式でしか世界と対決しえないからでしょう。いわば民主的な方向によって、世界と協力することによって自分たちの利益を保つような生き方ができなくなつてしまった。ああいう特異な体制を維持しようとするれば、一党独裁を続けて、今度は自分の息子にまた政権を継がせる、そうならざるをえないと私は思う。そういう状況を前提にして、しかしそれに対して我々はどう配慮すべきか。それは、あまり腹を立てないということでしょう。

う。たとえば、北の核兵器の問題だったら、日本や韓国や中国がみんな力を合わせて反対の声を高めるといふような方式は、なんだか大人気ないように思われてならない。やはり、北に対しては厳しく接しながらも我々は配慮するといふ程度の、あなたたちがオーバーな行動をすると、それは許さないぞ、という、幼子に対する対応の仕方、それが我々に求められるだろうと思うのです。北朝鮮の政権はいつかは崩壊せざるをえない。この世界同時の不況の中で生き残り、金日成の家族が権力をずつと維持するということももうありえない。いつかは崩壊するものとして、我々は待つという姿勢で、しかしそこにおける住民の問題、そして飢え死にしている多くの人の問題をどう助けるかということを考えることが必要だと私は思います。

——今のお話をうかがって、日本のこの間の自民党政権が対北問題で、拉致問題の解決がないとだめだと常に入り口の議論で北朝鮮との交渉を拒んできた。盧武鉉政権が北最優先だったのとまるつきり反対です。拉致問題の入り口で足踏みして、北との本格的な交渉に入ろうとしない。北との交渉もするし、あるいは食糧が足りないのであれば、どんどん北の人びとに渡して、北の人たちに日本が食糧を援助している事実を知ってもらおう。将軍様だけがごはんを食べさせてくれるんじゃないということがわかるだけで違いますね。

池●日本でも、北朝鮮に対する一種の慰撫政策のようなこ

とが必要だと思えます。こんなことは考えられないのでしょうか。たとえば政府は建前上強いことをいうけれども、国民の方は、北と往来を続け、食糧などで助ける。そうすると北が身動きができなくなるでしょう。日本国民全体が北に対して対決姿勢をとって、だからやつつけるというふうな思いになるかもしれないですけども。一方で国民はしょっちゅう往来しながら、貧しい人びとを支援すると言って何か持つて行つて助ける。そうすると北朝鮮は、どうともできなくなる。そうしながら時間稼ぎをする、それ以外の方法はない。そういう時間稼ぎがまどろっこしいので、それが待てないといつて、何か特別な仕掛けをするとか、特別な対応をしようとすると、かえつて悲劇を起こしてしまふというように思われます。

李明博政権が発券するときに、北が受け入れられないような政策や発言が彼には多かつた。私はもちろん北に対して非常に批判的であるにもかかわらず、私はそれは駄目だと最初から思つていた。北に対してあれこれいうのではなく、黙つていなさいとアドバイスしたかつた。北が必要なきときにはそれを手伝う、呼応するといふように答えなさいといふのが、私の立場です。ただ政権を運営している連中は偉そうなことを言いたいから、私のいうことはあまり聞いてくれません。

## 韓国と日本の市民の役割とは

——最後に、いまの東アジアの状況のなかで、日本と韓国の市民には、何が求められているのでしょうか。

池●先ほども申しましたように、盧武鉉政権はその政権運営の失敗の中で、日本との関係も悪化させてしまいました。日韓関係は少し間違えると、すぐに糸がもつれたような状態になってしまいます。とくに過去の植民地支配のために、こういった関係を変えようとするのが難しいという面があります。一九四五年から六五年までの間の二〇年間は、戦前の反動として、非常な敵対関係をエスカレートさせてきたと思います。日本に対して、悪感情をそのまま負ってしまっていた時代である。しかし、一九六五年以降から、一応交流ができるようになりましたので、そういった姿勢が少しずつ変わりつつ現在まで続いてきた。長い目で見れば、変化してきたのです。

だから、今の日本の靖国の問題などに対しても、韓国は政権としては日本の首相の参拜に反対せざるを得ないでしょう。しかし、そのことであまり神経質になつてもいけない。国民の間ではものすごい勢いで新しい交流が展開されている。次の時代を展望してみたときに、日韓の間には東アジア全体の関係でいくと、大きな市民的交流の時代がおとずれています。政治が変わるのは速い、政権が変わる

のも速いけれど、その政治が日韓、アメリカや中国との関係を変えらるということは表面だけのことではないでしょうか。今はその表面だけの変化の力も、分量からいえば、非常に薄いものに過ぎないではないかと思えます。むしろ、国民の交流が、これからアジアを変えていく。

それは、政治が変わるのよりは遅いけれども、それは根底的に変えていきます。だから私は韓国において、日本の靖国問題とかあるいは独島（竹島）問題が起こったときに、それで喧嘩をしてもかまわない、やらせておけと思つていきます。それが我々の未来を決定するものではないと思つているからです。

日韓の間において、経済的關係が大きな問題になっていきます。経済の問題が恐慌の時代といわれるぐらいにいろいろ問題になっていきます。しかし、経済の問題がある程度いつたときに、その次の時代として、決して経済にのみ集中して我々人間は生きられない。すると次の時代の文化とはなにか。あるいはアジア全体との文化交流とともに、東アジア全体の新しい文化のルネサンスみたいな時代を築こうとするかもしれない。その方向へと、これからわれわれは緩慢ではあるけれども、動きだすと思えます。今我々が挫折感に陥っているのは、過渡的な時代であるからと考えています。

過去の知識人たちは論壇を騒がした時代に郷愁を感じているかもしれませんが。しかし、今は大衆の時代である。その中において、市民の交流がなされて、社会を大きく変えていつているのかもしれませんが。文化政策面においても、あるいは政治面においても、これは生かされていかなければならない。そういう先見の明をもって、政治や文化政策を動かさなくてはならないと思います。だから、私は、全体の国家予算から見れば何でもないから、出版などを大きく援助する事業などをすべきだと思っています。いま、出版の事業を支援することは、この次の文化の時代になったときのアジアに大きな遺産を残しておくことでしよう。そういう時代をつくらなければならない。

政治家というのは、得てして自分の人気のことしか考えられない。そこに限界があります。そうであれば、市民的な力がそれを超えていく。市民的な力というのは、国家の、あるいはアジア全体の社会の一〇〇年先を見ている勢力であるべきです。これは、これから、何かの政権に支配されるのではなく、政権の注目をひき、それに助言を与える方向に成長していかなければならないと考えます。たぶん、韓国はその方向に行くだろうと思います。そういう点では、批判はしますけれども、批判するということはそういう方向へのある種の希望をかけて言っていることです。

マスコミに対しても、政府に対しても、このような方向をとらなければならないと言っただけであって、私は決して悲観的には考えていません。今まで韓国が戦後において、ここまで来る間の苦難の時代をずっと回想してみると、決して今日に満足しているわけではないけれども、過去からこれまでよくもやって来たなあという気持ちがあるからです。

私はこれから、実際にヨーロッパみたいに共通の歴史教科書は作らなくても（韓国と日本との間で、あるいは中国もふくめて、いろいろ努力はされていることはとてもいいことです）、東アジアの歴史をとともに考え、その文化をいかに理解するかということがこれから重要な課題になると思います。私は一九七〇年代に日本に来て、東アジア云々と言ったり、日本と朝鮮との比較文化的な発想をしようと思いました。しかし、日本の歴史学者たちがあまり興味を示してくれなかった。日本は日本であるというように。それこそトインビーが言っていたみたいに、一国の歴史は地方史であるというような考え方、それをかみ合わせながら、これから、東アジアの文化を一つにして真剣に考えていかなければならないのではないのでしょうか。

文化史的にとらえて、東アジアにおいて中国文化が中心であったときに、日本にはどのような文化があったのかとよく考える必要がある。これからは、東アジア全体の磁場

といましようか、ひとつの文化的な場において、日本はどうであつたかということをもつと研究しないとならないと思います。私は、単純に文化の流れが一つだけあつて、中心があつてその周辺にはマージナルな周縁文化が成立したとは思わないのです。日本は島国であるという地政とかジオカルチュラル（地理文化）なものがありまして、日本ナリの文化をかなり作つたところに中国の文化が入つてきたのではないか。朝鮮は地域的に中国に近いから、すぐ中国から入つてきます。日本にはかなり間隙をおいて中国文化がやつてきた。だから、日本の中国文化の導入の仕方が朝鮮の場合と違うと思うのです。

漢文の読み方にしても、朝鮮は中国のように棒読みするけれども、日本の方は和漢文に作つてしまふ。日本の文化というのは、アジアのマージナルであるとは私は決して思わない。日本はユニークな文化を持つていたと思う。いろいろと文化的にも東アジア三国の中におけるユニークなところをこれから見ていかなければならないでしょう。

私は仏像に関心がありますけれども、仏像を見ますとね、日本の仏像は、目が一番美しいですよ。京美人の仏像だといわれるぐらい、目が美しく作られている。韓国の仏像は目が駄目なんです。しかし、仏像の身体の曲線がきれいなんです。やつぱり違う。それで、最近になって浮世絵

を見たら、どうして女性の目は美しく描いていないのかという疑問がでてきます。たぶん、あれは面と向かう女性の顔ではないでしょう。目を伏せている。それと関係があるのではないか。だから、同じ文化の流れがあつても、その社会体制によつていろんな違った表現の仕方をした。これがアジア文化の豊かさであると思います。

沖繩の問題まで絡めていうと、日本と同じになるのではなく、違つたものが、多元的なものが、ひとつになつていくことが現代社会です。だから、この東アジア共同体で、おのおの違いながらも、理解し合いながら住んでいくというので、初めて東アジアの文化が成立するのでしょうか。あまり同じことを強調したらいけないと私は思う。違いを強調しても、これは日本だからそうだというように考えるよりは、東アジア文化の多様な現れ方だと理解すればいいわけですから。そこから今後は、どのような文化を我々は生み出していくかということを展望していけばいいのではないのでしょうか。

## 追記

### 北の核実験と南の前大統領の死

五月下旬以来、韓国では騒々しい毎日である。二三日には盧武鉉前大統領が自らのちを絶つた。二九日には国民

葬が行われるというのに、二五日、北朝鮮は二年七カ月ぶりに核実験を行い、その日の午後には三発の短距離ミサイルをも発射した。

このことはまたもや国連安全保障理事会による制裁措置を呼び起こしてしまった。それに、この四月に北朝鮮に抑留されたアメリカのアジア系女性記者二人が北朝鮮における非公開裁判で一二年の労働教化刑に処せられたと報道された。

このような騒ぎのなかで韓国では前大統領の死のことが連日もつとも大きく報道されたのはいうまでもない。彼が大統領在任中の収賄の嫌疑で取り調べを受けたときとは打って変わって、国民のあいだには彼への同情と現政府、特に李明博現大統領に対する非難が渦巻いた。野党の国会議員もこれと行動をともにして「大統領は謝罪せよ」という声が続いている。

このような状況は一九四五年以来くり広げられてきた事件の数々を思い起こさせてくれる。朝鮮においては南北分断と朝鮮戦争そして軍事独裁政権の時代が続いた。韓国では一九八八年、ようやく民主回復の闘いが勝利して民主的な選挙が実施されるが、しかし軍事政権の流れを汲む与党が支配を続けた。九八年、初めて野党が勝利して進歩的な政治を掲げてきたが、去年再び保守政権に権力を譲ってしまった。

今は韓国においてはすでに進歩も保守もない。国民の人

気に左右される政権があるのみだと思うのだが、北朝鮮との対応においてはその区別がまだ頭をもたげてくる。現政権の北朝鮮への支援は目に見えて消極的になってきた。北朝鮮はアメリカのオバマ政権も彼らにとつて友好的ではないと見ている。

世界史では、大量に人間の生命を奪いあう残酷な戦争の時代は過ぎていくのではなからうか。それにもかかわらず、まだ戦争の火種がくすぶっているいくつかの地帯がある。中東もパキスタンもあるが、何よりも東アジアには朝鮮半島の南北問題がある。北朝鮮は一九四五年以来、金氏一家の独裁の下にある。韓国には年浅い民主主義の苦悩がまだ張りつめている。選挙には圧倒的多数をもって勝利したといつても、民主主義の名において国民を統治することは決して容易ではない。

世界的に現代における民主主義をかざした政権が味わう困難を思い起こす必要があるかもしれない。経済的にのみ危機に陥っているのではない。圧倒的に国民の支持を集めている支配勢力または与野党の合意の上に立っている美しい民主政治の国などほとんどどこにも存在しないようである。

朝鮮半島に民主主義的な安定が訪れるとすれば、それは世界史における新しい段階であるといえるのではなからうか。

(池明観・六月一五日)